

由来

三作神楽は、周南市北西部の和田地区三作（林・原赤・中村の3自治会を合わせて三作という）に古くから伝承され、七年目ごと（卯年・酉年）の式年祭で地元河内社に奉納されてきた。

その起源については定かではないが、明らかな資料としては、明和元年（1764年）の墨書のある面が残っていた。

神舞台本（三作神楽保存会が使用している詞章本）や言い伝えによると、「大宝年間（約1300年前）に大飢饉があったとき、この地方にも五穀が実らず疫病が発生し、村人は草や木の根をかんで飢えを凌ぎ、多くの死者をだした村は悲しみの声で満ちたという。この苦難から逃れようと、河内社に五穀豊穡と疫病退散を一心に祈願したところ、翌年からは作物が実り、病気も癒えた村には再び平和がおとずれた。村人はそのお礼として、3村落民総出で力を合わせて神楽を奉納するようになった。」と地元には伝えられる。

式年祭で神殿を設け神迎えをして23の神楽舞を奉納するこの神楽は、神祭りのひとつの古風な形をとどめ、中世の華やかな芸能をとり入れて祭りの興奮を高めている。

昭和62年に山口県の無形民俗文化財に指定され、平成6年に国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択され、平成12年に国の重要無形民俗文化財に指定。

また、三作神楽保存会は、昭和45年に発足し、地元三作の全世帯を会員として、「神楽を永久に伝承すること」を会の目的としている。



卓の舞



波に鯛



紅葉に鹿

神楽舞23番

- | | | |
|----|----------|----|
| 1 | 清めの舞 | 2名 |
| 2 | 荒神の舞 | 2名 |
| 3 | 河内社の神楽 | 2名 |
| 4 | 二つ太刀の舞 | 2名 |
| 5 | 恵美須の舞 | 2名 |
| 6 | 大元社の神楽 | 2名 |
| 7 | 二つ弓の舞 | 2名 |
| 8 | 卓の舞 | 4名 |
| 9 | 小原氏の神楽 | 2名 |
| 10 | 柴鬼神の舞 | 2名 |
| 11 | 小原大番社の神楽 | 2名 |
| 12 | 四つ太刀の舞 | 4名 |
| 13 | 小原大元社の神楽 | 2名 |
| 14 | 殿様神楽 | 1名 |
| 15 | 四つ弓の舞 | 4名 |
| 16 | 大番矛の舞 | 2名 |
| 17 | 大番社の神楽 | 2名 |
| 18 | 王子の舞 | 7名 |
| 19 | 氏の神楽 | 2名 |
| 20 | 三方荒神の舞 | 3名 |
| 21 | 神明の舞 | 6名 |
| 22 | 長刀の舞 | 1名 |
| 23 | 花鎮めの舞 | 2名 |



清めの舞

清めの詞

神楽に湯立の水を神がけて
はらへば身にも穢あらまじ
罪咎をはらひ清めて畏くも
神のをしへを仰ぐ今日かな



恵美須の舞

卓の舞詞

東方に向て句々迺馳命の神をすましめ奉る
此方春の景色と見へ候なり
唐人も神の御前の花を見て
わが日の本の春や知るらん
南方に向て軻遇突智命の神をすましめ奉る
此方夏の景色と見へ候なり
天津空雲のしら峰いと高く
神の石窟のこゝちこそすれ
西方に向て金山彦命の神をすましめ奉る
此方秋の景色と見へ候なり
長へに神に心をなびかして
つみはあらじとふく秋の風
北方に向て罔象女命の神をすましめ奉る
此方冬の景色と見へ候なり
神の八十氏人の袖の上に
神代をかけて残るつきかけ
中央に向て埴安命の神をすましめ奉る
うこなき二つ岩根の宮柱
身をたつる世の例ならずや



国際民俗芸能フェスティバル
平成18年2月23日 国立劇場



恵美須の面



柴鬼神の面



長刀の舞

長刀の詞
諸人も千早振世の神かせに
よろずのつみをはらう長刀

花鎮めの舞
～ 神殿に 何をふらすや さらさらと 小金まじりを 小夜にふらす～



東京からの神楽調査団とともに（本田安次氏中央左）
平成5年11月15日